

報告七

歴史実践をさかなでに読む .. 偽史・オカルト・歴史実践

小澤 実

ここまで、六名の評者によるエッセイレビューを見てきた。「序」で既に述べたように、偽史、オカルト、歴史実践は、それぞれ別個の対象となるように見えて実はそうではない。むしろ、特定の個人や集団がおこなう「歴史をか」と言う行為、つまり歴史記述／ヒストリオグラフィ―に注目してこれら三つの分野における近年の成果をみた場、この「歴史をか」という行為が、歴史家という専門団にとつてではなく、人間にとつてどういうことなのか、ということの一端があらわになってくるように思われる。本稿では、それぞれのレビューの背後にある歴史学の動向に目を向けることで、近年のアカデミアにおける偽史、

オカルト、歴史実践が提起する問題系を整理し、その上で「歴史をか」という人間の行為の一端を振り返っておきたい。

一 偽史（・偽書・偽文書）の文脈

報告一「偽書もまた「史料」なりき」、報告二「近現代日本における偽作史書とその受容を考えるために」、報告三「江戸しぐさ」の現在と未来」は、いずれも近世から現代にかけて行われた偽作行為を対象とした書籍を取り上げている。椿井文書にせよ古史古伝にせよ江戸しぐさにせ

よ、いずれもそうした偽作行為の「成果」である。それらは、歴史学による批判には耐え得ない偽史であるにもかかわらず、巷間で流通し、何らかの形で受容され、私たちの目の前にある。ここでは、とりわけ近代から現代の日本において、偽史・偽書・偽文書が生成・流通・受容されるという歴史事象を分析するために必要と思われる論点を四つ取り上げたい^①。

第一に郷土愛に基づく共同体意識の問題である。日本は世界でも有数の郷土史の刊行が盛んな国である。地域の寺社による季節ごとの行事、行政による地域史の定期的刊行、地域ごとにある歴史愛好団体の活動、教育機関などにおける地域の歴史を掘り起こすクラブなどに、大学で歴史学などの教育を受けた地域行政組織に属する学芸員や教員などが関わることで、地域独自の歴史記述が積み重ねられてきた。こうした郷土史や地方史が隆盛を誇る背景には、自身が生まれ育ち、自身のアイデンティティの一部をなす地域に対する郷土愛に起因する郷土の来し方に対する関心^②、地域振興や経済的理由による観光資源としての郷土の掘り起こしを求める行政の試み^④、極端な形になると、自らのルーツである郷土を他者により良く見せようとする顕示欲なども指摘できるかもしれない^⑤。それらアクターの様々な思惑が焦点化したのがまさに椿井文書であったことをまずは思

い出しておきたい^⑥。

第二に近代歴史学以前の歴史記述に対する関心である。ランケに始まりリースが日本に持ち込んだ近代歴史学が必ずしも歴史記述の始まりではないという点は「歴史をかく」と言う観点から『近代日本のヒストリオグラフィ』で追及された論点であるが、ここでは偽史への影響が大きい国学に目を向けておきたい。記紀神話を伴う神代史、その変奏曲でもある中世日本紀、近世における国学による研究、近代における国家神道と接続する近代国学などの研究は、近年とみに盛んとなっている。長谷川が述べるように、記紀以前の歴史を創出する古史古伝や神代文字などはこうした国学の展開の中で生成した偽史的要素であり、とりわけ近代国学の検討が進めば、偽書成立のコンテクストもより明確になるように思われる^⑧。

第三に行政による歴史への関与である。椿井文書では行政が刊行する地域史などを通じて、「江戸しぐさ」は文科省による検定教科書への掲載により、偽史に公的なお墨付きが与えられた事例である。専門部署を欠いた行政機関自体が、対象とする歴史事象の正誤を判断することはできない。しかしながら、一旦公的なお墨付きが与えられると、必ずしも専門的な判断力を持たない受容側は、その「お墨付き」にしたがって、不確かな内容も「事実」として受け

取る可能性がある。歴史記述・行政・読者との関係を考えるにあたっては、記述内容だけではなく、それを社会がどのように受け止めるのかという観点から論じる一連の研究などが参考になる。また、「キリストの墓」を観光資源とする青森県新郷の事例や、ワースポットなどのスピリチュアルな内容を取り込んだ日本遺産など近年各レベルの行政が推し進めている観光と偽史との関係も今後深められてゆく論点になるだろう。他方で図書館などの一般の公共施設における偽史や偽書の紹介なども確認することができる。偽史に対する関心の拡大という点では歓迎すべきことであり、大学図書館などではあまり所蔵を見ない偽史そのものが購入され読まれていることが確認できるという意味でも興味深い結果を示してくれる。

第四にアカデミズムの作法に見える陥穽である。椿井文書が偽作であることを確信できず郷土史の史料として紛れ込ませてしまったのは、「時代ごと」に専門家養成を行ってきた歴史学の教育システム（室井）にも原因を見ている。つまり、椿井文書の史料としての価値を見抜くためには中世ならびに近世双方の知識が必要であるにもかかわらず、大学での専門分化が進んでいたため、流通してしまったという経緯である。ここにはもちろんタコツボ化に対する批判もあるのだが、もう一つ考えておかねばならないのは、

アカデミアそれ自体の自浄能力の問題である。戦前以来、椿井文書を疑問視する研究者は皆無であったわけではないが、結局のところ、それらが偽文書だと明示的にアカデミアの中で共有されることもなかった。権威筋が真正文書として一旦取り上げてしまったために、疑念を抱きつつも口籠らざるを得ない共同体の同調意識もまた問題としているように思われる。これがより極端な形で現れているのが、埋めた偽造石器を掘り返して新発見としていた旧石器捏造事件と存在しない研究者や史料を証拠史料として論拠としたカール・レーフラー事件であろう。いずれも、捏造者が関わっていた学界では疑念視する向きもあったが、結局のところ、前者については毎日新聞による証拠写真がスクープされるまで、後者については若手研究者による捏造の告発が行われるまで、学術書として世間に流通した。このような一連のプロセスは、ただ一個人の顕示欲に帰することはできない。小保方事件と同様、成果の検証システムの不備や疑念を述べにくい一種のムラ社会としてのアカデミアの構造も考慮されねばならない。

二 オカルトの文脈

報告四「近現代における超自然信仰と不安のマーケット」

と報告五「オカルト・学知・第三帝国」は、従来オカルトとされた事例を扱った書籍を取り上げている。オカルト(原義は隠されたもの *occultus*) とは秘匿されたもの、の意味である。目に見える世界から隠された知の体系という意味では、グノーシスのような古代世界にまで遡るが、ここで問題となるのは、一応の科学知が成立し、世界の仕組みは科学で説明可能とされた近代以降に、人々の間でオカルティズムとみなされたものが重要となる。つまり、近代人の理解フレームを前提として「オカルト」とされた現象である。オカルティズムは世界的な現象である一方、受容した国家の文脈で独自の展開も遂げる。報告四と五では、イギリス、ドイツ、日本という三つの異なる言語圏並びに国家におけるオカルトの状況を検討している。ここでは、日本に限定して、四つの問題点を共有しておきたい。

第一にスピリチュアリティとの関連である。近代日本におけるスピリチュアリティの研究は宗教学の分野で一定程度蓄積されてきた。西洋から流入した思想のみならず、神道思想や仏教思想にも内在する靈性をめぐる議論は、制度化された既成組織の中のみならず、新興宗教、新新宗教、擬似宗教といった、様々な水準での信仰のあり方と接続してきた。いずれにしても、明治以降に日本に導入された近代科学による合理的説明とは必ずしも一致しない靈性やス

ピリチュアリティをめぐる言説は、それ自体が持つ宗教性、分かり易さ、身体性などと接合しながら、多くの人々に受け入れられてきた。近代宗教との関係を論じる島菌⁽¹⁸⁾、メディアとの関連を強調する堀江、オウム真理教を詳細に分析する太田らの研究は、近現代日本において一見ばかばかしく見えるオカルト思想の言説とスピリチュアリティの親和性を考察する一助となる。さらに最近の傾向でいえば、魅力的なマーケティングを提供するスピリチュアリティと観光産業との関係も注目されている。

第二に、メディアとの関連である。御船千鶴子の事件以来、オカルトは近代学問の枠組みの中では分析対象ではなかったかもしれないが、メディアにとっては不可欠のトピックであった。雑誌、テレビ、書籍、SNS などによって、超常現象、予言、霊、UFO といったオカルト現象は、受容者側から大きな反応と需要を引き起こすトピックであった。それは後日の、科学者らとの間に起こるオカルト検証番組に引き継がれ、エンターテイメントとして消費された。これらはサブカル分析として時々の証言はあったが、メディア社会の特性を論じる一つの要素としての研究は比較的近年に始まっている。中心の一人は柳廣孝であり、近代におけるオカルト言説をメディア媒体の中に探る彼の研究は、バイオニア的な意味を持っている。一九七〇年

代から八〇年代にかけてのオカルトブーム研究、森達也や高橋直子のようなメディア関係者による内側からの証言や分析、民俗学や民俗現象との関連を論じた大塚や大道の研究なども欠かせない。大陸書房のようなオカルト系出版社や『ムー』のようなオカルト雑誌などの本格的分析もまたれる。

第三に、情報を受け取る側の心のあり方についての議論である。脳科学と関連させた感情史やニューロヒストリーが学会を席卷しており、人間の認知や感情も、生物学的要因と歴史的社会的に構築された要因の双方から検討することが求められている。全体ではなく見たい一部を選択して見る、わからないことを単純化してでも理解しようとする、特定の傾向を持つ情報に連続して触れることで認知パターンを特定の方向に固定するといった一般的な人間の認知のありかたが、情報が氾濫し取捨選択を迫られる現在のフェイクニュース社会においてどのような人間集団を生み出すのか。例えばアメリカ社会における反イスラムや反移民感情に加えて、ユダヤ陰謀論、フリーメーソンやテンプル騎士団のような秘密結社、聖書原理主義(創造論)などが、単純に科学的思考の欠如のみならず、インターネット支配に対する「反知性主義」の発露として論じられる。日本の文脈に置き直したとしても、コンテンツが変わるだけで構造は類

似している。ホメオパシーやEM菌などの偽科学や陰謀論と同様に、偽史やオカルトも、十分な科学的根拠が得られなくとも、いや得られないがゆえの「オルタナティブな世界」として人間を魅了することがある。

三 歴史実践の文脈

既に述べたように、一と二で瞥見した偽史やオカルトは、ただそれだけを取り上げた場合、とりわけアカデミアから見れば「些末な事象」かもしれない。つまりそれらの言説自体は信憑性が乏しい、もしくは、歴史学という学問の枠組みで取り上げるほどの内容を持っているわけではない。しかしながら、ここ数年で、翻訳も含めて日本国内でこうした傾向の研究が次々に刊行されているのは、それが扱う内容の重要性が認められたから、というよりも、歴史実践という観点が歴史学や歴史分析の中で重要性を増しているから、と考えた方が良いのかもしれない。報告六「歴史学再生のために―歴史実践から考える」で対象とした、Doing Historyやパブリック・ヒストリーは、とりわけ英語圏で盛んになっている、歴史知と社会との接点へのクローズアップという論点である。従来、再現性や客観性を学問としての担保としてきた近代歴史学に対し、主観性に注

目する研究が注目を浴びてきけるのも同じ文脈であるように思われる。以下、三点を指摘しておきたい。

第一に、エゴヒストリーの問題である。一般的に言えば、日記や自伝のような個人の主観に依拠する歴史資料は、行政文書などの客観性の高い史料と付き合わせることで、事実を抜き出す材料として用いられてきた。しかしエゴヒストリーの立場に立った場合、そうした自己認識が現れる史料それ自体を自己認識を証言する史料として用いる。³³文化人類学者である保莉が、現地民の歴史認識それ自体を一次史料として構築した歴史を『ラディカル・オーラル・ヒストリー』で提示したように、例えば公教育で教育を受けた経験があるからと言って、誰もが公定の教科書が示す歴史を共有しているわけではない。³⁴「歴史をかく」に引きつけて言えば、個人はその時々で得られた情報を何らかの判断基準と認知枠組みに従って自分自身を立脚点とする歴史を描き出すのである。そうであるならば、それらは単純に個人だけではなく特定の共同体や時代の思考様式を再現するために重要な材料となる。「オルタナティブな歴史記述」となる偽史やオカルトもまた、そのために重要な一次資料となりうる。近代人と認識枠組みの大きく異なる前近代人を対象としてきた前近代史とは異なり、今ここにいる自分と対象を同一視しやすい近現代史にとっては、とりわけ今

後重要になってくる視角であろう。誰もが教育を受けた通りに科学的な歴史像を選び取っているわけではないのである。

第二に、公共と共同体との関係の問題である。規律化、近代化、国民化などと言った近代史のトピックは、しばしば国家が国民を同色に染める過程を論じてきた。日本の文脈でいえば、常に国家の展開と近代化の中核には近代天皇制があり、そこに統合される国民という図式が見え隠れしていた。もちろんその図式はそれとして今後も有力な分析枠組みとしてあり続けるだろうが、他方で偽史から見えてくるのは教科書準拠の歴史認識とは距離をとった地域共同体の姿であり、オカルトから見えてくるのは、学者が求める「正統な」科学認識とは対抗する世界観である。様々なメディア経路を検討し受容者側の論理に光を当てる Doing History や、パブリックヒストリーは、「ポスト・トゥルース」の一角を占めるであろう、まさにこうした偽史やオカルトに対する分析にも扉が開かれている。³⁵

第三に、戦後言説空間の変容である。例えば、先駆的な試みとして柏書房の「パルケマイア叢書」を考えてみたい。一九九四年から二〇〇八年にかけて二三冊が刊行された、ともすれば、京都学派の再評価や右派思想という戦後民主主義やそれと連動する戦後歴史学の言説空間においては半

ばタブーとされてきたテーマを収集したとすら思えるこの叢書は、近代内外における国粹的な思想や運動を時代のコンテキストの中で正当に位置付けようとの試みであったように見える。もちろん、こうした試みに対しては、その正当性と有効性を認めつつも、戦争へと国民を導いた国粹思想を肯定するのかという批判はあり続けたし今後もあり続けるかもしれない。しかし現実には、平泉澄とて、アカデミズム史学の中で忘却もしくは近代史学史の中で忌避されていただけで、それらとは別の文脈のアカデミアや研究枠組みの中では連綿として生き続けていた。^⑤

報告六が対象とした二書は、歴史家が再構成する歴史的事実を「歴史的過去」として、一種の自己中心主義的な歴史観へと導きかねない危険要素とみなす。そこには、歴史を教える立場にある教員や学者は、最終的にどのような社会へと人々が求めるべきかを教える側が自覚することがまず先にあることが示されているように思われる。極端な言い方をすれば、ある種の価値観を前面に出して「歴史的過去」を支配する態度には賛否両論もあるだろうが、偽史やオカルトがまさにそのような問題系の渦中にあつたことは歴史が示す通りであることを思えば、道徳的判断の問題は避けて通ることはできない論点にもなりうるだろう。^⑥ 歴史実践という現在注目を浴びる試みをさかなでに読むことで

見えてくるのは、トリヴィアルな事象扱いとされてきた偽史やオカルトの背後に隠れていた、社会におけるヒストリオグラフィーの受容と創造、「反知性主義」になりがちな大衆意識、歴史家自身の価値判断の問題である。

自分自身は学問的枠組みに沿った「科学的かつ正統的な」思考や行動をしていると考えるものであっても、ふと、あたりを見回してみればどうだろうか。自分の肉親がいわゆる歴史修正主義に則った発言をしていないだろうか。親しい友人がネットに入り浸りになり陰謀論に淫していないだろうか。自分の所属する組織で偽史やオカルトに基づく公式行事が行われていないだろうか。ここでその是非はあえて問わないが、偽史やオカルトは身近にあるものなのだ。新書すら売れないと学術出版や啓蒙出版が嘆く一方で、市井の一般書店には、偽史やオカルトはあふれている。集団としての人間を対象とする学問であるならば、少なからぬ人々の思考や行動に影響を与え、そしてまたそうした集団の中から新しい言説や実践を生み出す偽史やオカルトをめぐる問題系を、必ずしも「些末な事象」として等閑視することはできない。アナル派や社会史研究が、「些末な事象」を民衆心性やモラルエコノミーとして歴史学の舞台へと引き上げたように、歴史実践という試みは、偽史やオカルト

をもまた、時代の価値観、集合心性、それらを機能させるシステムなどを明らかとする歴史学の問題系として生命を与えているように思われる。

歴史実践をさかなでに読む(小澤)

註

- (1) 偽文書に関する先駆的な検討として、久野俊彦・時枝務編『偽文書学入門』(柏書房、二〇〇四年)。
- (2) 地域の小中高の教員らとともに作り上げた地域史論集として注目すべきは、黒田智・吉岡由哲編『草の根歴史学の未来をどう作るか…これからの地域史研究のために』(文学通信、二〇二〇年)。
- (3) 著名な郷土史家は日本各地にいるだろう。筆者の高校時代の同級生であり、生徒会長でもあった大成経凡もまた、精力的に地元である愛媛県今治の歴史を掘り起こした書物を刊行している。出身地である波止浜の実業家の生涯を描いた近著『伊予が生んだ実業界の巨人八木龜三郎…北洋漁業に名を刻む蟹工船の先駆者』(創風社出版、二〇一九年)は、第三五回愛媛出版文化賞大賞を受賞した。
- (4) 例えば、偽史である「キリストの墓」を聖地として観光資源とする青森県新郷村に関しては、岡本亮輔『聖地巡礼…世界遺産からアニメの舞台まで』(中公新書、二〇一五年)の第四章を参照。
- (5) 枚挙にいとまないが、偽史を含めた「歴史をかく」と言う行為を考える論集として、時枝務・由谷裕哉編『郷土史と近代日本』(角川学芸出版、二〇一〇年)。
- (6) 椿井文書他畿内における偽文書利用のあり方を論じたのは、馬部隆弘『由緒・偽文書と地域社会―北河内を中心にして』(勉誠出版、二〇一九年)。なお馬部は、研究者としてのルールを守ることなく、いたずらに状況を混乱させる「一般人」に対して警告を発している。馬部隆弘『アテルイの「首塚」と牧野阪古墳』『志學臺考古』二〇(二〇二〇年)、一―六頁。
- (7) 松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ―』(山川出版社、二〇一四年)。
- (8) 藤田大誠『近代国学の研究』(弘文堂、二〇〇七年)・川久保剛・星山京子・石川公彌子『方法としての国学―江戸後期・近代・戦後』(北樹出版、二〇一六年)・齋藤英喜『読み替えられた日本書紀』(角川選書、二〇二〇年)など。
- (9) 著者自身の関心でいえば、ローレンツ・フォン・シュタインと神代文字とルーン文字との関係を論じた言説がある。礫川全次「第四章 神代文字とルーン文字」同『日本保守思想のアポリア』(批評社、二〇一三年)、一〇九―一三三頁。
- (10) 長谷川亮一『皇国史観』という問題―十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』(白澤社、二〇〇八年)。
- (11) 昼間たかし「オカルト歴史が「日本遺産」に―全国に広がる「偽史」町おかし」(<https://hbol.jp/231966>)を参照。また、日本遺産の問題点を巡っては、金子淳「博物館を取り巻く「物語性」をめぐる―「観光立国」政策と日本遺産を中心に―」『桜美林論考・人文研究』一一(二〇二〇年)、八〇―九六頁。
- (12) 埼玉県立図書館資料展示「奇書・偽書・禁書―謎と不思議と悲劇の本たち―」(二〇一一年二月二六日から五月二六日)・大阪府立図書館小展示「義経II ジンギスカン伝説を追う」(一九九八年五月二三日から六月二八日)・小展示「偽書・偽史の世界」@大阪府立図書館(二〇二〇年三月一日から六月三〇日)。
- (13) 逆にいえば、馬部が椿井文書に気づいたのは、大阪大学大学院で中世史ならびに近世史双方の訓練を受けていたか

ら、とも言える。

- (14) 毎日新聞旧石器遺跡取材班『発掘捏造』(新潮文庫、二〇〇三年)・毎日新聞旧石器遺跡取材班『古代史捏造』(新潮文庫、二〇〇三年)・上原善広『発掘狂騒史―「岩宿」から「神の手」まで』(新潮文庫、二〇一七年)。
- (15) 小柳敦史「人文学の学問性と研究不正：最近の事例より」『北海学園大学人文論集』六九(二〇二〇年)、二六―三五頁を参照。
- (16) オカルト思想の通史としては、大野英二『オカルティズム：非理性のヨーロッパ』(講談社、二〇一八年)並びにアントワーヌ・フェーヴル(田中義広訳)『エゾテリスム思想―西洋隠秘学の系譜』(白水社文庫クセジュ、一九九五年)より詳細には Christopher Partridge (ed.), *The Occult World*, London: Routledge, 2014 を参照。
- (17) 日本におけるオカルト的なるものの歴史については、秋山真人・布施泰和『日本のオカルト―一五〇年史―日本人はどんな超常世界を目指してきたか』(河出書房新社、二〇二〇年)・ASIOS編『昭和・平成オカルト研究読本』(サイゾー、二〇一九年)。
- (18) 島菌進『現代宗教とスピリチュアリティ』(弘文堂、二〇一四年)。
- (19) 堀江宗正『ポップ・スピリチュアリティ：メディア化された宗教性』(岩波書店、二〇一九年)。
- (20) 大田俊寛『オウム真理教の精神史―ロマン主義・全体主義・原理主義』(春秋社、二〇一一年)・大田俊寛『現代オカルトの根源：霊性進化論の光と闇』(ちくま新書、二〇一三年)。
- (21) 有元裕美子『スピリチュアル市場の研究―データで読む急拡大マーケットの真実』(東洋経済新報社、二〇一一年)・山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』(弘文堂、二〇二〇年)を参照。
- (22) 公共放送であるNHKで検証番組も持たれていた。NHKスペシャル取材班『超常現象：科学者たちの挑戦』(新潮文庫、二〇一八年)。
- (23) とりわけ次の二冊を参照。一柳廣孝『こっくりさん』(千里眼)・増補版『日本近代と心霊学』(青弓社、二〇二〇年)・一柳廣孝『怪異の表象空間：メディア・オカルト・サブカルチャー』(国書刊行会、二〇二〇年)。
- (24) 一柳廣孝編『オカルトの帝国―一九七〇年代の日本を読む』(青弓社、二〇〇六年)・前田良一『今を生き抜くための70年代オカルト』(光文社新書、二〇一六年)。
- (25) 高橋直子『オカルト番組はなぜ消えたのか：超能力からスピリチュアルまでのメディア分析』(青弓社、二〇一九年)・森達也『オカルト：現れるモノ、隠れるモノ、見たいモノ』(角川文庫、二〇一六年)。また、オカルト現象の仕掛け人として著名であった中岡俊哉を扱った、岡本和明・辻堂真理『コックリさんの父：中岡俊哉のオカルト人生』(新潮社、二〇一七年)も参照。
- (26) 大道晴香『イタコ』の誕生：マスメディアと宗教文化』(弘文堂、二〇一七年)。
- (27) 有用なカタログとして、「昭和・平成のオカルトを彩ったテレビ番組、漫画・雑誌、出版社、オカルト研究会・人物伝」『昭和・平成オカルト研究読本』、二七三―四四六頁。
- (28) 感情史の基本文献として、ヤン・プランパー(森田直子監訳)『感情史の始まり』(みすず書房、二〇二〇年)・バーバラ・H・

歴史実践をさかなでに読む(小澤)

- ローゼンワイン、リツカルド・クリステイアーニ(伊東剛史他訳)『感情史とは何か』(岩波書店、二〇二一年)。
- (29) カリン・ウォールホルツ(三谷文栄・山腰修三訳)『メディアと感情の政治学』(勁草書房、二〇二〇年)。
- (30) アンジェラ・サイニー『科学の人種主義とたたかう…人種概念の起源から最新のゲノム科学まで』(作品社、二〇二〇年)・E・C・スコット(鶴浦裕・井上徹訳)『聖書と科学のカルチャー・ウォー…概説アメリカの「創造 vs 生物進化」論争』(東信堂、二〇一七年)。
- (31) 歴史上の陰謀論に事例を取ったのが、呉座勇一『陰謀の日本中世史』(角川新書、二〇一八年)。
- (32) パブリックヒストリーの基本書は報告六で紹介されている。岡本充弘「パブリックヒストリー研究序論」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』二一(二〇二〇年)、五一―七二頁・岡本充弘編『歴史を射つ…言語論的転回・文化史・パブリックヒストリー・ナショナルヒストリー』(お茶の水書房、二〇一五年)。
- (33) 長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』(岩波書店、二〇二〇年)。
- (34) 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』(岩波現代文庫、二〇一八年)。
- (35) リー・マッキンタイア(大橋完太郎監訳)『ポストトゥルース』(人文書院、二〇二〇年)。こうした「ポストトゥルース」の動きに乗るのは右派だけではなく、地球温暖化や原発に見える環境思想の極端化でも観察される。差し当たり、メディアとの関連を視野に入れた著作として、トランプ登場初期に執筆された会田弘継『トランプ現象とアメリカ保守思想』(左右社、二〇一六年)や、日本の「草の根右翼」を見る伊藤昌亮『ネット右派の歴史社会学…アンダーグラウンド平成史一九九〇―二〇〇〇年代』(青弓社、二〇一九年)・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー…九〇年代保守言説のメディア文化』(青弓社、二〇一八年)など。
- (36) シリーズの劈頭を飾る一冊目が最近復刊された。ジョージ・L・モッセ(佐藤卓己・佐藤八寿子訳)『大衆の国民化…ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』(ちくま学芸文庫、二〇二〇年)。
- (37) 田中卓『平泉史学と皇国史観』(青々企画、二〇〇〇年)・植村和秀『丸山眞男と平泉澄』(柏書房、二〇〇四年)・若井敏明『平泉澄』(ミネルヴァ書房、二〇〇六年)など。平泉の思想を受け継ぐ朱光会人脈もまた戦後の文部省などに残り続けた。
- (38) 歴史教育の観点から論じるのは、サム・ワインバーグ(渡部竜也監訳)『歴史的思考―その不自然な行為』(春風社、二〇一七年)。
- (本学文学部教授)